

新潟市で生まれ育ったあやめさんは、幼いころからクラシックバレエ筋の生活を続けていました。大人になり、舞踊で生計を立てられるという点に惹かれて芸妓の道を選び、芸妓の育成および派遣を行う柳都振興株式会社での修業と活躍を経て独立しました。現在は三児の母として家庭を大切にしながら、置屋組合の副組合長として古町花街を支えています。

今回は、山形大学と新潟大学の学生で協同し、多くの人の協力を得ながら、あやめさんへのインタビューを企画・実施しました。この記事は、山形大学「まちの記憶を残し隊」が行ったインタビューをもとに、新潟大学「メディア論実習C」の受講生が作成しました。

結婚・子育てから独立へ

あやめさんはインタビューの中で、芸妓になって間もない頃に、知人から「すぐに芸妓を辞めると思っていた」と言われていたことを明かしています。しかし、そんな周囲の予想に反し、あやめさんは挫けることなく芸妓を長く続けました。しかも、従来は結婚したら芸妓を辞める、もしくは芸妓を辞めてから結婚することが通例であったにもかかわらず、結婚後も仕事を続ける柳都振興出身芸妓の第一号となったのです。そうした選択ができる花街が新潟以外にないことが、あやめさんの決断を後押ししました。

しかし、それまでの芸妓の常識に反するような選択は、はじめ

は先輩芸妓に反対されることもあったそうです。そのような中でも、お客さんたちは芸妓を続けることに理解を示してくれて、それに助けられたとあやめさんは語っています。その後、二人目、三人目のお子さんの出産の際には産休制度を利用して、あやめさんは働き続けました。そして、子どもが小学校に通うようになったこと、独り立ちしての仕事に目処が立ったことがきっかけとなり、あやめさんは柳都振興からの独立を決断します。あやめさんは、馴染みのお客さんも増え、お子さんも成長した今ならば「いける」と感じたのだと話していました。

結婚を機に芸妓を続けることを断念する人がほとんどであった花街において、時代の変化に合わせて結婚後も芸妓を続ける先駆者となったあやめさんは、芸妓を女性が長く続けられる仕事へ変えてゆく道を、確かに切り拓いたのです。



人柄と働く姿

穏やかな笑顔と話し方が印象的なあやめさんは、初対面でも安心感を与えてくれます。芸妓になったばかりの頃の思い出を尋ねると、「正座に慣れていなかったので、足が痺れるのに苦労した」と語り、「お座敷では、タバコの処理や物を取りに行くなどの仕事を率先して行い、足が痺れるのを防いでいました」と笑って教えてくれました。大変なこともあったであろう過去の経験を明るく語る姿に、実直で前向きな人柄がにじみ出ます。

現在は置屋組合の副組合長としても、古町を引っ張る立場となったあやめさん。上と下とに気を配る“中間管理職的な立場”にあると笑いながらも、その言葉には古町芸妓を束ねる立場の重みを感じられます。「自分は昔のやり方を変えたい方ではないけれど、時代に合わせていかねばならない」と言いつつ、「自分がお姐さんたちを真似して成長してきたように、自分も真似されるお姐さんになりたい」と語る言葉には、伝統を守りながら次代へつなぐ柔軟さと後進を思う温かさを感じます。親しみやすい安心感に溢れる頼もしさで、あやめさんは古町芸妓として愛されています。

芸妓の今昔

昭和期には、新潟で芸妓を職業にしていた女性は100-200人ほどもいて、花街はにぎわっていたそうです。しかし今では芸妓の数は約18名まで減少し、伝統文化を継ぐ人は限られています。あやめさんは、「今は今の、昔には昔の良さがある」と語ります。芸妓という仕事を続けることで、その良さをなくさないように文化を伝えていきたいそうです。

古町の未来への想い

あやめさんは、「芸妓は、文化の伝え手であるのと同時に仕事でもある」と語ります。私たちはその言葉を聞いて、芸妓という職業は、今を生きる女性が選択可能なひとつの職業であるのだという事実改めに気づかされました。あやめさんはまた、長年舞台に立ち続ける先輩芸妓を心から尊敬し、「同じところにどっしり構えることの意味を後輩にも伝えたい」との思いを伝えてくれました。伝統を守りながらも自分が興味を持つことを大切に、次の世代が「続けたい」と思える花街をつくりたい。あやめさんの穏やかな語りには、古町の未来を想う温かな気持ちが込められていました。